記者クラブの皆様

2019年12月1日

日頃よりお世話になっております。
この度、東海第二原発の再稼働をめぐって「原子力防災について考えるシンポジウム」を開催することになりましたので、ご案内させていただきます。
主催は「東海第二原発の再稼働を止める会」です。詳しくは別紙チラシをご参照ください。

今年、常総生協の脱原発委員会が、東海第二原発の再稼動反対の署名に取り組み、10月11月と5市1村の首長さんに届け面談しました。
防災担当者も含めてすべての皆さんがおっしゃった事は「広域避難計画を策定中であって、これが完成しない限り、再稼働を判断することはできない。避難計画策定は非常に難しい。そして住民の皆さんの意見をきちんと聞かなければならない」と言うことでした。　再稼働の行く末を握る鍵である、広域避難計画をどのように考えるか　?は、今もっとも重要な問題であるといえます。

5市1村の首長さんや担当者の皆さんの原発避難への認識は、どうも心もとないものと感じました。
原発立地の東海村の避難訓練の様子を写真などで見ても、マスクも帽子もつけないで、長袖長ズボンのカッパも身に付けない軽装備！
100人余りの少人数の人たちが遠足気分で避難所と指定されたところに出かけて、自衛隊の災害食を食べて講話を聞いて帰ってくるだけの、形だけの簡便なものです。これが何の経験実績と言えるのか甚だ疑問です。

福島の原発事故の時に現実の避難の様子はどうだったのか？正しく知ってもらいたいと考えました。
　かねてより東海第二原発の再稼働に並々ならぬ関心を持ってくださっている福島県双葉町の元町長井戸川克隆氏に、まずはお話していただきます。

2011年3月に起きた福島第一原発事故時の各自治体住民は、国から一片の情報も届かないで何が起きたかも伝えられなかったため、それぞれ様々に右往左往し無用な被曝を強いられました。このときの法律では、電力会社から15条通報が発令された時点の3月11日午後4時半過ぎには、原子力緊急事態宣言が出されて、住民の避難が開始されるべきでした。しかし保安院と官邸はやみくもに混乱し時間は空費されて、早期にとるべき住民保護策は無視されたのです。

　福島第一原発事故の本当の原因と経過も明らかになっていないのにも関わらず、東海第二原発が再稼動されようとしています。
避難計画の策定が自治体に押し付けられているのは、本来責任を負うべき国や電力会社の不作為というべきで、全く理にかなっていません。

このような実態のほかに、放射能による影響への知見も公開されていない現状で、住民が再稼働への正しい判断をできるかどうか、疑問が持たれます。
　驚くべきことに、立地自治体の最高責任者である東海村村長さんが、「原発はなんの不安もなく安全であって、福島では何1つ問題が起きていない」との

意見を雑誌対談で公表する事態が起きたのです。
原子力規制委員会が、はっきりと「安全は保証できない」と公言しているのにも関わらず！です。

私たちは、じっとしていられない思いで、この「原子力防災シンポジウム」との催しを開催します。
ぜひ、各報道関係者の皆様には告知をしていただきたく、
またご参加くださいますように、お願い申し上げます。

「東海第二原発の再稼働を止める会」
事務局　披田信一郎
090－3232－0214